普連土学園校友会報

第110号
令和6年(2024年)2月15日

発　行：普連土学園校友会
住　所：〒108-0073 東京都港区三田 4-14-16
E-mail：friends@f-koyukai.com

責任者：松浦 栄子
ＴＥＬ：03-3451-7700
ＦＡＸ：03-3451-1959

Friends School and Me

普連土学園と私

普連土学園前理事長　畠中 ルイザ

In 1970, I applied for a job at Friends School because I loved my Quaker high school and wanted to work in a Quaker school. I also wanted to experience an entirely different language and culture. I was twenty-two years old.

After a scary interview in Philadelphia with Esther B. Rhoads and other members of the Japan Committee of Philadelphia Yearly Meeting, I arrived at Haneda on a hot day in late August. Ishida-sensei was waiting to welcome me. She took me straight to the Friends Center just in time for my first meal in Japan: tofu and edamame. I did not yet know how to use chopsticks, so it was very hard to eat the hiyayakko. The edamame were a challenge, too, because I thought I had to eat the tough, fuzzy pods. What a surprise I got!

In September, classes began. There were more than three hundred girls for me to teach. And they all looked alike! They all had hair and eyes of the same color, and the same blue uniforms. They also had long, unfamiliar names – which I struggled to memorize.

This was the beginning of my life in Japan. Since then, over fifty years have passed, and Friends School has become my home.

As I look back on my life here, my heart fills with the voices of teachers, students, and graduates. It is this stream of voices which has carried me through the days of my life and has kept me afloat when I faced the sadness of losing my parents and husband.

1970年 着任早々の授業風景
（史料室提供）

目次

クリスマス礼拝
校友会バザー
校友生は今
カンボジア報告
八十歳になりました

I wish I had a time machine! I would slip into a seventh-grade* class to hear that sweet explosion of laughter at a silly English skit. With a time machine, I would gladly step back into a senior* writing class at the moment when a student asks me a question that is too hard for me to answer – and that makes me feel so proud of her. Or, I would linger in the teachers' room to overhear my colleagues worrying about a student. Or, I would slip into the auditorium to listen again to a student's reihai talk – the one about true friendship, or the one about the end of the world, or the one about Anpan Man. Or, I would just sit quietly, surrounded by the voices of students and graduates of all ages, singing Hallelujah together.

In all these voices, I have heard a common chord – formed by the notes that reverberate at the heart of a Friends School education: warmth, integrity, and acceptance of others. In the words of an old English children's song, "These are the Keys of the Kingdom."

I am so lucky to have shared these many years with you. I thank you all.

*seventh-grade：中学１年生　*senior：高校生

校友会クリスマス礼拝
12月2日(土)

クリスマスを祝うこととは

～「YES」存在の肯定～

ルカによる福音書1章26～38節

日本基督教団霊南坂教会 主任牧師
後宮（うしろく） 敬爾（よしや） 先生

40年ほど牧師をしながら幼稚園の園長をし、毎年この時期には子供達とクリスマスとは何かを考えます。子供達に本当のクリスマスの喜びを知って貰いたい、それが子供達の「心の種火」になるからです。皆さんも普連土学園で出会ったキリスト教の、特にクリスマスのメッセージはきっとずっと心の中に残っていると思います。普段は気付かなくとも存在の危機となった時、それが「命の種火」となり風を吹き入れると再び生きる力が湧いてくる、それがキリスト教教育にとって最も大事であり、それを一番伝えられるのはクリスマスなのです。

本日の聖句は受胎告知の場面です。天使がマリアに「おめでとう、恵まれた方」と祝福します。厳格な時代に婚約中の懐妊が何故おめでたく恵まれているのでしょうか。

ここで一曲、ジョン・レノンとオノ・ヨーコの『Happy Xmas (War Is Over)』を聴いてみましょう。ベトナム戦争中の反戦の曲なのに、何故二人は「Happy Christmas, Very Merry Christmas」と歌っているのでしょうか。二人の出会いのきっかけはギャラリーに展示されたヨーコのアートでした。ジョンが脚立を上り虫眼鏡で天井を見ると小さく「YES」と記されていました。YES即ち存在の肯定（あなたは良き者だ）のメッセージが二人を結び合わせたのです。

クリスマスを祝うことは、「私は神に肯定された人なのだ、そしてたとえ争っていたとしても相手もまた神に肯定された人なのだ」と一年に一度立ち戻り生き直す決心をすることではないでしょうか。

聖書の中で天使がマリアを祝福したのも、不安と恐れしかない状況でも神は共におられ存在をYESと仰って下さるからなのです。

私達がMerry Christmasと言い交わす度、自分を肯定し相手を肯定し、キリストが伝えて下さった愛を生きると決心する、それがクリスマスではないかと思うのです。

私達の日々には矛盾や悲しいことが多いからこそ、クリスマスに意味があると思います。なぜならキリストは悲しみの中に身を置いた救い主だからです。私達が矛盾に苦しむ時、悲しい時、「大丈夫、あなたは生きていてよいのだ、あなたの存在は肯定されるのだ」と伝えるためにキリストは神であることを捨て人となり私達のところに来て下さったのです。

クリスマスおめでとうございます。

お話を編集担当が要約しました。

クリスマス礼拝の後、ローズホールに場所を移し懇親会が開催されました。コーラス部による合唱に聴き惚れるうち、4年ぶりに一堂に会した70名の「普連土のクリスマス」気分は一気に高揚、全員でクリスマスキャロルを次々と合唱、〆には「きよしこの夜」を英語バージョンでアンコール。暗譜で歌いきった校友生に、ご参加くださった後宮先生から感嘆のお言葉を頂きました。お開き後はミニバザーがあり、手芸品、アクセサリー、ガレットで賑わいました。

★参加者の声

「仕事の予定が変更になり心を清めようと（笑）急遽来た。こうしてまた集まれたことに感謝。」

「久々に思い切って参加。後宮先生のお話が心に沁みハレルヤで元気を貰った。」

校友会バザー
2023年11月25日

久々に本格的な校友会バザーを開催しました。

今年は手芸品（校友会とともに後援会からも参加）、アクセサリー、委託品といった通常の出品に加え、東京月会からは例年の出版物に加えてお菓子やタペストリーなどの装飾品、学園史料室からは学園に保存されていたレコードや書道用品など、さらには図書室にて法政大学との共同企画による校舎模型の展示を行うなど新しい出展もあり、楽しんでいただけたのではないかと思います。

参加者は我々の期待をはるかに超えて、お手伝い、出展者、来場者など、校友会、後援会関連を合わせて昨年の3倍以上の335名に上りました。

一方で、来場者数が予想を超えてしまったため、入場まで時間がかかったり、目当てのものが売り切れてしまったり、といった事態も発生してしまい、お詫び申し上げるとともに、来年への課題としたいと思います。

皆さんの普連土を大事に思う気持ちが感じられた一日でした。この紙面をお借りして参加してくださったすべての方に心より御礼申し上げます。

校友会バザー委員会
89回生　進藤 玲子

2023年度校友会バザー・ミニバザー収益

2023年12月16日
単位：円

摘要	売上	仕入	収益
手芸	214,920	0	214,920
アクセサリー	51,300	0	51,300
委託	549,590	304,872	244,718
東京月会	3,000	0	3,000
計	818,810	304,872	513,938

人気の「ふれんどら」売り場

クリスマス用品の品揃えも豊富

開場を待つ長い列（中学校舎前）

多くの人で賑わう会場
校友生同士の会話も弾みます

会場準備も和気あいあい

温かく優しい手触りの編み物

校友生は今

校友生による普連土学園の礼拝のお話を要約で掲載致します。会社役員の宮間三奈子さん（87 回生）、劇作家・脚本家の長田育恵さん（103 回生）の２名です。

在校生向けの礼拝ですが、校友生の皆さまにもお読み頂きたい内容です。

「可能性は無限大」

87回生 宮間 三奈子（旧姓：神谷）

１９７７年普連土学園に入学し、ごくごく普通の女子高校生として3年間を過ごしました。小学生の頃は考古学博士を夢見ていましたが、高校生になると建築家へと変わり、大学は機械工学を専攻するという、良く言えば好奇心旺盛、別な言い方では何をしたかったのかなと思えるような10代後半でした。ただ、興味があった分野については、エジプト旅行や世界遺産を巡る旅、週末の洋館巡りと日常に彩を添えて人生を豊かにしてくれています。

大学院卒業後は、奨学生を募集しているからと大日本印刷株式会社（ＤＮＰ）に男女雇用機会均等法1期生で入社しました。ＤＮＰは創業が１８７６年と普連土学園の創立より少し早いですが、明治の文明開化時代にそれぞれスタートしています。入社後は研究開発部門、新規事業開発部門、本社の採用・人材育成部門と幅広い分野を経験し、２０１８年大日本印刷初の女性執行役員、２０２１年には初の取締役となりました。採用・人材育成及びダイバーシティ推進組織の担当役員として、常に一貫して組織風土への問題意識と変革の必要性を強く認識し、女性のみならず従業員の多様性を尊重し、互いに受け入れ、それらを強みとして活かせる組織風土づくりを目指しています。

創立１３６周年記念礼拝でお話しする機会をいただき、皆さんにとって何かしらの気づきにつながればと思索しました。

生徒・学生時代は学校の時間割があり、学びと復習で成長していきます。学校を卒業し社会に出ると、仕事や社会とのかかわりを通して成長して行きますが、成長のための時間割は自分で作らなくてはなりません。この時間割を組み立てる上で、覚えておいて欲しいこととして、キャリアの80％程度は、本人も予期しない偶然の出来事によって形成されているということです。偶然ならば、前もって準備はいらないのではと思ってしまいがちですが、好奇心・持続性・柔軟性・楽観性・冒険心を持って行動することで「好ましい偶然」は起こる、日頃から「好ましい偶然」が起きるような能動的な行動をしている人は偶然を計画化できるのです。

もう一点は、成長している人の特徴として、内省を習慣にしています。内省によく似た言葉に「反省」がありますが、これは過去の行動や結果に対する反省と改善を重視し、「内省」は未来に向けて自己の理解や成長を促進することを意識させます。ありたい姿と現実にはどのようなギャップがあったのか、そのギャップを埋めるために何を変えれば良いのかと、自己との対話や内なる声に耳を傾けることを習慣化すると変化が生まれます。讃美歌３１０番にあるように、祈りは内省に繋がり、皆さんの成長を支えてくれます。

これから先、理不尽なことに見舞われたり、後悔にさいなまれることもあるでしょう、それでも悠久の歴史の中でとらえてみるとどうにかなるものです。皆さんの可能性は無限大です、世のひかりとして活躍されることを願っています。

宮間さん

趣味のひとつはクリスマスの飾りつけ。ツリーだけでなく家全体のイルミネーションにもこだわります。

高３のころの休み時間。左から佐々木さん、宮間さん、鎌田さん

考古学への興味は子供のころから。娘さんとエジプト旅行。

「母がくれた約束」

103回生 長田 育恵

私は劇作家・脚本家として活動しています。

本年４月から９月末まで、ＮＨＫの朝ドラ『らんまん』の脚本、全１３０話を担当させていただきました。すべてのキャスト、スタッフの力が結集し、ドラマは大好評となりました。

今日は、私の原点が普連土学園で過ごした日々にありますので、それをお話ししたいと思います。

将来は物語を書くことで生きていきたい。それが明確な夢となったのは、中学三年生のとき、司書の先生に一冊の本を薦められたからです。それは湯本果樹実さんの「夏の庭」という本でした。

ちょうどその頃、母が難病に罹り、入退院を繰り返すようになりました。同居していた祖父も亡くなり、私は学校生活と家族を支えることがうまく両立できずに悩んでいました。心が強張るような思いで日々過ごしていたのですが、司書の先生が勧めてくれたこの本を読んで、涙が溢れて止まらなくなりました。

それは、なんでもない１シーンでした。主人公の少年たちが訪ねた老人ホームで出会った小さなおばあちゃんが「さようなら、また来てね」と夕陽の中でいつまでも手を振っているという描写でした。それがまるで自分の肉眼で見たかのように焼き付きました。入院先の病院で泣いていた母のこと、打ち解けて話せないままに逝ってしまった祖父のことなどもいっぺんに溢れて、本の中に私の心も溶けているようでした。この体験をきっかけに、物語を通して人の心を描き出すことを一生の仕事にしたいと思ったのです。

小説家を目指して大学に進み、そこで演劇と出会いました。小説家への夢はいったん棚上げし、いつか自分の人生の後半生で取り組めばいいやと、とにかく演劇の脚本に打ち込みました。卒業後はそのまま演劇やミュージカルの依頼をいただくようになり、自分の劇団も旗揚げし、やがて戯曲賞や演劇賞も受賞しました。

ところが、コロナ禍となりすべてが変わりました。

予定していた舞台がすべて上演中止となってしまったのです。

その時に、声を掛けてくれたのがＮＨＫでした。時間が出来たなら、映像の脚本を書いてみませんか、と誘ってくださいました。そして単発のドラマを一本書きました。この作品のプロデューサーが次の朝ドラを手掛ける担当だったことから、朝ドラの依頼をいただいたのです。

信じられないことでした。舞台が専門だったので映像の脚本に造詣が深いというわけでもありません。それなのにいきなり全１３０話の朝ドラ。依頼をいただいたときには正直、やり遂げられるかも分からない、恐ろしくてたまらないものでした。

ですが、私を救ってくれたのが、母の言葉でした。

朝ドラのリリース発表があった日、実家に母を訪ねました。母は私に「小説は書き上げられた？」と聞きました。私は、「今日発表があったのは朝ドラで、小説じゃないよ」と答えました。すると母は「でもあなたは、ずっと小説を書きたいと言ってたでしょ？」と言ったのです。

私にはなんだか、母が、私の未来について問いかけてくれたように感じました。母の中ではきっと、私がこの仕事もすべて無事にやり遂げていて、その先に待っている小説について「書き上げられた？」と聞いてくれたのではないかと。

それから五日後、母は息を引き取りました。

朝ドラ執筆中ではありましたが、母が私の未来へ約束を残してくれていたおかげで、私は前を向いて、朝ドラを無事に書き続けることが出来たのです。

こうして、私もまだ、この学校の学生だった頃に抱いた「いつか小説を書きたい」という夢の途中にいます。皆さんも今、何か心の中に宿るものがあれば、それを是非持ち続けてください。今皆さんが大事にしているものは、きっとこの先も自分の道を照らしてくれると思います。

長田さん

息抜きは愛犬ルノ（アメリカンコッカースパニエル）と遊ぶこと。校友生に一言「お互い頑張りましょう！」

礼拝当日、
懐かしい図書館で

礼拝を終えて。左から　恩師鈴木呂嘉先生、長田さん、
同窓生で現在学園の教師である梅田悠紀子先生

カンボジア アキラプロジェクト報告

校長　青木 直人

普連土学園は6年前からカンボジア人アキラ氏の地雷撤去活動を献金によって支援してきました。

アキラ氏はポルポト派の少年兵として戦わされ、多くの地雷を埋めた過去があり、その地雷が多くの人を傷つけた悔恨から、カンボジア全土の地雷撤去をライフワークにしています。2023年の夏、生徒代表4名が直接献金を届け、現状を視察することで、自分たちの献金がどのように使われているかを見聞し、その意味を考え、普連土生と共有しました。

【参加した生徒の感想】

★陸路でタイからカンボジアの国境を越えた時、国が変わると匂いまで変わることを体験した。

★地雷撤去の現場を見て、日本に平和でかつ安全な日常があることは当たり前じゃないのだと感じた。

★アキラさんと同世代の母が楽しんで青春を送っていた同じ頃に、アキラさんたち若い兵士は戦い、命を落とした人も多くいるのだと考えた。

★世界中どこでもそれぞれの場所でみんなが人として生きていて、文化や社会背景が違っても、本質的に人間として同じなのだと強く感じました。

★将来発展途上国でボランティアをしたいと思っています。

★献金の行き先を自分の目で見ること、地雷原や地雷博物館に直接足を運べたことは、かけがえのない体験だった。

★アキラさんが話してくださった少年兵としての壮絶な過去。笑顔は絶やさなかったけれど、何か悲しそうな雰囲気が忘れられません。

アキラさんに普連土生からの献金を渡しました。

地雷撤去のための防護服を着て、金属探知機を持っています。

地雷博物館の前で。2060年までかかるとされた作業が技術と機器の進歩で2030年に完了予定とのこと。

水汲みに行って地雷を踏み右脚と手の指を失ったセインさん。支援のおかげで、今では立派なお母さん。

カエルのから揚げを食べました。レストランにはハンモックがあり、食後はハンモックでゆったり。

地元の小学生と紙飛行機で遊びました。

校友生による全校礼拝

校友会会長　松浦 栄子

毎年晩秋には全校礼拝で校友生にお話をしていただいています。

◆10月30日　林 千英子さん（100）

生徒の時には女優とモデルという仕事に就くことは想像もしていなかったが、大学でこの仕事を選んだ。役にも恵まれ楽しく幸せだったが結婚で辞めることになった。しかし、きっかけがあり再びお芝居に携わるようになった。皆も可能性がたくさんある。人生を決めるのは自分自身なのでいろいろ挑戦するとよい。

◆11月6日　星野 麗華さん（103）

Yes to the doors You open, Yes to the doors You close. このゴスペルを心の拠り所にしている。大学へ進んだあと、順風満帆にキャリアを積んできたが体調を崩してしまい仕事というdoorをcloseした。が、今新しいdoorをノックし始めている。これからも常に前を向いて、歩みを続けていきたいと思っている。

◆11月13日　長田 育恵さん（103）

※内容は5頁でご紹介しています。

普連土だより　学校近況　第百八十一信

コロナ禍前の日常が戻ってきました。5月から夏休み前までの各学年の宿泊行事は、全て予定通りに実施、体育祭も全校で保護者の方のご観覧のもと、実施することができました。

多くの生徒活動が制限なく実施できていますが、個人的に一番大きく感じているのは昼食です。

新型コロナウイルス感染症が五類感染症となった5月の連休明けから、パーテーション使用および黙食を個人判断としました。普段はマスクをしている生徒も多くいますが、会話のある昼食が戻ってきました。私は中3修学旅行の引率に加わりましたが、食事の時の会話の楽しさと大切さを改めて実感させられました。普段の体調管理をきちんとしている生徒が多いためか、本校では新型コロナの感染爆発もなく、日々の生活が行われています。

夏のクラブ合宿も4年ぶりに実施しました。参加生徒全員が、初めてのクラブ合宿となります。多くのクラブで、引き継がれていないこともあったようですが、無事に、そして楽しく有意義に行われました。生徒ホールを「学び合いを目的とした学習スペース」に改修、9月より運営を開始しました。デザインおよび使用ルールは、有志生徒たちによって決められました。飲食あり（お菓子類の自動販売機設置！）で、教え合う自習室です。10月の学園祭も、コロナ禍以降、全員参加で実施することができました。海外研修もジョージ・フォックス・ツアーを始め、新たにカンボジアやアメリカ研修も実施、今後は留学制度も充実していく予定です。

毎朝の礼拝も、全校が講堂に集まって守っています。6学年で讃美歌を歌っています。

12月になり、講堂にはクリスマスツリーが飾られ、中学宗教委員の生徒が飾り付けをしました。クリスマス礼拝では、牧師の大澤宣先生のお話を伺います。

来年も、平穏な学園生活を送らせられるよう願っています。

（松浦 良知先生,23年12月記）

八十歳になりました

傘寿を迎えられた68回生の皆様に浦口先生が描かれた絵葉書セットをお送りいたしました。

♥懐かしい浦口先生の絵葉書を賜わりまして心より御礼申し上げます。

♥浦口先生の描かれた花々で一気に普連土時代に戻り、旧中学校舎の外階段にあった沈丁花の香りが甦りました。暗いニュースの多いこの頃、心が拒絶反応を起こし易くなり落ち着かない日々を過ごしておりましたところ、ほっと穏やかな心を取り戻す時間をもつことができました。

♥先生の山の怪我のお話や野の花のお話を楽しく思い出しました。2年半まえから一人暮らしになりましたが、庭の花々や13人の孫達にはげまされております。

♥先生の生物班にいた私は今も植物大好きで、私の和菓子店「腰掛庵」（山形県天童市）の庭の草花の世話を朝夕しています。友達の果樹園や畑の手伝いを楽しくしています。

♥先生の白衣姿、木の香り漂う山中湖寮での楽しい日々を、昨日のように思い出します。お蔭様で色々な趣味を楽しみ元気に過ごしております。

♥今はコロナ禍、戦争、気象異常と、嫌なニュースが多く、一日も早くこの状況から脱出して生きがいのある穏やかな昔のような生活に戻りたいです。

私達68回生が通っていた頃は日本の高度成長期で一番元気で明るく希望に満ちていました。東京タワー建設、皇太子様ご成婚など思い出は尽きません。

♥裏千家のお茶の道を続けておりますが、浦口先生の絵葉書を一枚一枚ずつ拝見しながら、野の花の茶花にも思いを馳せております。

♥学園のますますの発展を祈念申し上げます。

◆お便りを下さった方々（敬称略）

赤沼満起子　荒井宏子　今井幸子
金子恭子　鈴木恵子　鈴木真智子
田崎素子　出口一枝　仲野和子
西森和子　深谷明子　吉野知子

このページの内容についてのお問い合わせは、校友会事務局（０３－３４５１－７７００）まで。

校友会だより

◆２０２４年の行事予定

・ホームカミングデー
日時　３月２日（土）13～16時
対象　110・111・112回生

・ミニ講演会
日時　３月16日（土）13～15時
場所　中学校舎１階　Ｑセミナー室
講師　押尾　雅代さん（96回生）
　　スイス政府観光局
　　メディアマネージャー

・校友会総会
日時　６月１日（土）11時
場所　新渡戸稲造ホール

◆校友会事務局より

・運営費納入のお願い
口座記号　００１１０・８
口座番号　８７９３２（右詰）
加入者名　普連土学園校友会
郵便局より払込み。回生・お名前・ご住所をお書きください。
スマホ決済可。

・校友会ＨＰが新しくなりました！
学園の様子やイベントのお知らせなど随時更新しています。

▲HPはこちら

129回生 成人を祝う会

1月8日（月）118名の同級生とお世話になった先生方にご出席いただき、129回生「成人を祝う会」が開催されました。高1からコロナ禍となり、修学旅行も有志となってしまった学年でしたが、明るく和やかな雰囲気の中、懐かしい先生方のお話、友人達との楽しいおしゃべりではしばし時を忘れ、普連土生に戻った楽しいひとときとなりました。準備をしてくださった幹事の皆様に感謝、また明日からそれぞれの道で頑張ろうという気持ちになりました。

（藤永　志乃）

訃報

謹んでお知らせ申し上げ、心より哀悼の意を表します。

41　善方止巳子（上村）　23・6・18
48　中島美枝子（藤本）　22・2・21
50　岩倉　理子（秋元）　23・1・15
51　杉山　邦子（横山）　18
51　小島　静子（山口）　23・7・9
51　酒井壽栄子（池田）　23・7・27
51　石川　昭子（石井）　23・8・12
51　斎藤　陽子（酒井）　23・10・29
52　A田中　晴代（小堀）　23・8・20
52　B伊藤　純子　22・8・14
52　B村上　康子（村山）　22・10・17
52　B西村千穂子（鷲山）　23・4・17
56　A井上　春子（三井）　22・11・18
56　A武中　節子（小林）　23・1・20
57　末広　京子（窪田）　22・10・30
58　菊地喜代子（小川）　23・3・26
59　黒澤　恵津（黒澤）　19・8・16
61　光吉　郁子　20・5・8
61　伊藤　和子（星野）　23・2・25
61　臼井　早苗　23・4・11
61　高橋　慶子　23・5・23
62　山田　恭子（佐野）　23・6・24
64　吉井加恵子（杉本）　22
65　小西万智子（木田）　23・2
65　西山　千恵（羽太）　23・7・28
67　鴇田　佳子（鴇田）　23・11・9
67　米川　正子（湊）　22・9・30
70　林　恭子（斎藤）　23・7・16
75　長谷川真佐子（坂本）　23・7・5
81　近藤　葉子（近藤）　22・10・22
81　林　敦子（横山）　22・9・10
85　山川　美香（海老沢）　23・8・3
86　佐々木生子（柳沢）　23・11・20
97　北村　笑子（吉宇田）

校友会より、お花とお悔やみカードをお送りしました。

◆災害のお見舞い

２０２４年は、年初から能登半島地震や羽田空港衝突事故と波乱の幕開けとなりました。被災された方々へのお見舞いと共に、皆様の安全と被災地の一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

◆住所登録・変更届のお願い

会報が届いていない方、転居やご結婚などでご住所等に変更があった方、ＱＲコードから事務局にメールで届出が可能です。

編集後記

ルイザ先生は22歳で普連土学園に赴任なさり、英語教師、校長、理事長として53年間深い愛情を持って学園に尽くしてくださいました。

英文で書いていただいた理由は、長い間の種々の思いは母国語が表現し易いのではないかとお願いしました。

〈入江（65）森本（72）冨山（73）佐藤（93）渡邉（94）石原・白樫（95）白井（105）〉